

凜子は貫太に、こちらに住むおんな友だちに会いに行くと言った。嘘をついてから、頭の中はかつての恋人、緒方佑介のことについていっぱいだった。

この日、凜子は気がつくとき、ぼんやりと空想にふけていたようで、ちよつと、ちよつと、と貫太に肩をゆすられる場面が幾度もあった。

「もう一度聞けど、ロマンあふれる史跡と、七八六の石段だったら、どっちに行ってみたい？」
両方ともいいところよ。屋島山上で、厄除けの瓦を投げてイイダコを食べるのもよし、こんぴらさんの本宮を越えて奥社まで足を伸ばすのもよし。そこはとて神聖な場所だね……。

と、凜子はとつさにすらすると答えそうになった。それをごまかすように、ゆったりとした口調で「そうね」とつぶやき、天井を見上げ、考えるふりをした。

ナイター中継は終わり、画面は地方のニュース番組に切り替わっていた。

貫太は窓際に置かれたサイドテーブルに肘をつき、明日観光に訪れる場所を決めようとしている。

凜子は、白い天井に入った小さなひびをじつと

見つめながら、かつて昔の恋人と訪れた二つの場所を、思い出していた。

屋島と金刀比羅宮。

凜子は佑介とともに、双方のてっぺんから見下ろした景色を、いまでもはっきりと覚えていいる。

そのときの感情はどちらかというマイナスなもので、それはきつとマリッジブルーと呼ばれるものだ。当時は思い込んでいた。

しかし、と凜子は考える。いま思えば、あのときに凜子が抱いた「どこか肌にあわない」「なんだかしつくりこない」という感情は、この土地と自分との相性を表していたのかもしれない。

ガイドブックを広げ、「本日、栗林公園を制覇」と楽しそうに笑う貫太に、凜子は飲み物を買いに行ってくると告げて、ホテルを出た。

外へ出ると、生ぬるい空気と雑踏が凜子を包んだ。のどは乾いていなかった。ただ束の間、ひとりになりたかった。

近くには駅と海がある。目を閉じて思いっきり深呼吸をすると、あの日と同じ匂いがした。凜子は一瞬で、過去に引き戻された。

海の匂い。畳の匂い。どこかでわらを焼いているような匂い。肩を寄せたとき、佑介のシャツからも同じ匂いがした。

佑介とは七年前、東京で出会った。

凧子は大学卒業後、何度も田舎に帰って来いと言う母親の言葉を無視し、そのまま東京で就職をした。名の知れた食品メーカーだった。

凧子は第一希望だった企画部に配属になり、忙しいながらも充実した日々を送っていた。

同じ部署の先輩に熊野という男がいた。熊野の口癖は「誰かいい人できたか」だった。それはセクハラですよ、と凧子は何度も言い返していた。

ある日、熊野は凧子にいつもの質問をした。それはセクハラですよ、と切り返すつもりが、なぜか凧子はそのとき、いつもとちがうセリフを口にしていた。

「誰かいいひとを、紹介してくださいよ」

ほんとうに自分が言ったのか、と疑うような威勢のいい声だった。

その数週間後、熊野に紹介されたのが佑介だった。熊野は「とにかく間違いない男だ」とくり返し言ったあと、佑介を凜子にひき合わせた。

熊野と佑介は、異業種交流会のパーティで知り合ったのだという。「見合わなさそうに見える二人が、兄弟のように笑い合っているのを見て、凜子は不思議な気分になったものだ。風に流されるまま生きているような熊野と、一分一秒でも無駄にしたくないとばかりに生き急いでいる佑介なるようになるが口癖の熊野と、緻密な計画を立てなければ動けない佑介。

男女の仲のように、ふたりもまた自分にないものを補うかのように、相手を求めたのだろうか。

佑介と凜子はその後、友人同士として同じ時間を過ごすようになった。共通の趣味であるアウトドアスポーツを楽しみ、どちらからともなく恋に落ちてゆくのに、さほど時間はかからなかった。

脚をがくがくさせながら山を越え、ボートごと岩にぶつかりながら川をくだるたびに、二人の距離は縮まっていった。

あと百歩で頂上だよと佑介は凜子を励まし、こ

れ私^{わたし}が作ったの、と言って爆弾^{ばくだん}のようなおむすびを、凜子^{りんこ}は佑介^{ゆうすけ}に手渡^{てわた}した。

どこにでもあるような恋^{こい}が、ありふれた形^{かたち}です
ターゲットした。

ふたりが恋人^{こいびと}としてつきあい始めて、二年^{にねん}が過ぎようとしていた頃^{ころ}だった。

佑介^{ゆうすけ}は、凜子^{りんこ}を自分^{じぶん}の実家^{じつか}に連れて行^いきたいと切り出^{きりだ}した。この発言^{はつげん}がなにを意味^いするのかを、凜子^{りんこ}はうすうす感じていながら、なにも知らないふりをし、平静^{へいせい}を装^{よそお}っていた。

もう三十歳^{さんじゅうさい}だと焦^{あせ}る気持ちと、愛^{あい}を形^{かたち}にする意味^いなどあるのかという思いが、小さな胸^{むね}のなかでせめぎ合^あっていた。

佑介^{ゆうすけ}は住宅^{じゅうたく}メーカーの営業^{えいぎ}をしていた。東京^{とうきょう}に本社^{ほんしゃ}を持つ会社^{かいしゃ}で、香川^{かがわ}には支店^{してん}があった。結婚^{けっこん}を機^きに、ふるさとに帰^{かえ}り支店^{してん}で働くつもりだ、と彼^{かれ}は言^いった。

「環境^{かんげい}が変わってもいいの？」と聞^きいても

「田舎^{いなか}に帰^{かえ}っても、同じ^{おな}ように営業^{えいぎ}ができるの？」
と聞^きいてみても、彼^{かれ}の答^{こた}えはいつも同じ^{おな}だった。

「ほら、俺は長男だから」

それは、凜子の望む質問の答えではなかった。が、あまりにも胸を張って言いのける佑介を見て、それ以上つつこんで聞くことは、はばかられた。

しかしその発言は、凜子が佑介と結婚した暁には、自分も東京での仕事を辞めて、香川へ行くことを意味していた。

その事実を目のあたりにするたびに凜子は、まだ彼と結婚すると決めたわけではないし、と自分に言い訳をし、問題を遠ざけていた。

さらに、ただ恋愛をするのではなく、結婚を前提につきあうということになれば、凜子には佑介に告げなければいけない大切なことが、ひとつあった。

それは、凜子が過去に婦人病を患ったことで、将来妊娠し、子どもを授かる確率は非常に低いということだった。

佑介に伝えなくてはいけないと思うものの、機会やタイミングをうかがっているうちに月日は流れ、二年が過ぎてしまった。

佑介の実家は、高松市郊外にある木造建築の大

きな二階建ての家だった。

それこそ、栗林公園のミニチュアを思わせる立派な庭があり、小さな池にはやはり、鯉が泳いでいた。

廊下を歩くとギシギシと床が鳴り、その音が静まり返った空間の空気を裂いた。

「凜さん」と佑介の母である静恵は、凜子のことを呼んだ。

「凜さん、あんたは何もせんでええ。いまはお客様さんやけんな」

静恵と佑介の弟の嫁である実夏が、二十畳ほどある座敷に、どすどすと大きな音を立てて、凜子のために布団を敷いていた。

凜子は二人の女のすぐそばで、まるで居づらさを紛らわすかのように、壁に飾られた写真に視線をさまよわせた。

写真の中の佑介の曾祖父や曾祖母は、凜子を厳しい目で見つめ返した。あたかも、品定めをされているような気がして、凜子は思わず目を伏せた。

佑介は、近々凜子と結婚するつもりであると、家族に話したのだろうか。それとも気の早い佑介

の母親が、息子が家に女性を連れてくるということとは、近々結婚するつもりにちがいない、と早合点したのだろうか。

凜子は、将来佑介と結婚し、もはや自分がお客さんではなくなった日には、この二人の女のようにせつせと働くことになるのだろうかと思像した。ときには来客のために、ときには年中行事のために。この大きな座敷を走り回り、流れる汗も拭かず、はげたお化粧も直さずに……。

それが嫌だというのはない。
嫁ぐとは、きつとそういうことだ。

ただ静恵に、いまはお客さんだからあなたはなにもしなくていい、と何度も念を押されることが、凜子には苦痛だった。ちよつと手伝って、と声をかけてくれたら、どんなに気が楽だっただろうと思ふ。

なにもさせてもらえず、大きな座敷の片隅にひとりぽつりと立たされた凜子は、心の底にそつと錘を置いていかれたような気分だった。

(以上6月6日放送分)